

## 新たな支援の類型を求めて Looking for a New Type of Human Supports

キーワード：伴走的支援，保護者，メンタルヘルス，ACT，障害児，支援者

### 報告

谷 晋 二  
(立命館大学文学部)

谷 今、御紹介いただきました谷と申します。立命館大学の文学部と応用人間科学研究科に所属しています。

今、非常におもしろいなと思ってお話を聞かせていただきました。私は心理教育というフィールドで仕事をしておりますので、そういう点から話題提供をさせていただきたいと思います。

最初きょうのお話の3つの観点について整理しておきます。最初に伴走的支援というネーミングを松田先生等と一緒に考えたときには、マラソンのようなイメージがあったのですが、きょうのプレゼンでは、山登り、マラソンに対して山登りというイメージではないだろうか、と言う観点でお話をします。

それからもう一つは何を目的に支援をするの

かという点について話題提供したいと思っています。病気の人とか困難を抱えている人を治していくというイメージではなくて、よりよい生活とか、よりよい人生に向かっていくというイメージです。ウェルビーイングを拡大するという視点です。

もう一つは、ひとつ専門的な用語にはなりませんが、サイコロジカルフレキシビリティという点についてお話をしたいと思います。心理的柔軟性と訳されています。この3点について、きょう、発達障害への支援のお話を進めていきたいと思います。

もともと私は大学の研究者ではなくて、臨床家です。20年間心理で開業をしておりました。その後、大学へ転身をしました。開業のときには、直接子供たちにさまざまなスキルをトレーニングしていました。私の専門は言葉を教えるということなので、障害のある子供たちへ、特に言葉のしゃべれない子供たちに直接トレーニングをして、言葉がしゃべれるようにするという仕事で生活をしていました。

それから、お父さん、お母さんたちに、例えばパニックが起きたときはこんなふうに対応するのだよとか、トイレトレーニングを教え

1) 本稿は、2014年10月21日に立命館大学衣笠キャンパスで行われた立命館大学人間科学研究所アドバンスト研究セミナー Vol.8での報告(谷晋二「新たな支援の類型を求めて」)を元に、若干の補正追加を行ったものである。なお、本報告に先立って、垣田裕介氏(大分大学大学院福祉社会科学部研究科准教授)による報告「新たな生活困窮者自立支援制度と伴走型支援」が行われていたため、本稿でも一部、垣田氏報告内容への言及がある。また、報告の後には、松田亮三氏(立命館大学産業社会学部教授/人間科学研究所所長)の司会により、フロアを交えた討論が行われた。その討論の内容についても一部収録している。

るにはこんなふうにするのだよとか、ソーシャルスキルを教えるのはこんなふうにするのだよというようなトレーニング技術を教えていました。

それから、伴走的な支援ということと言うと、お父さん、お母さんたちとか、学校の先生たちにそういうスキルとかを教えたり、メンタルサポートのトレーニングをしたりすると。それから保護者への心理教育をやったりするということをやっております。

先ほどお話をしましたように、伴走的支援のイメージは山登りのイメージです。つまり、お父さん、お母さんたちは自分の山があって、自分の山を登っている。支援者はどこにいるのかというと、同じ山を登っているわけではなくて、別の山を登っているんだと。別の山を登っていて、支援者も山登りをしています。支援者が自分自身の山を登りながら、お父さん、お母さんたちに、僕も山を登っているから、お父さん、お母さんたちも頑張ってねと。こっちから見ると、お父さん、お母さん、あっちのルートのほうがいいんじゃないとか、こっちのルートのほうがよさげに見えるよと。僕もそっちから見たら僕のルートはどう見えるというふうに見ながら2つの別々の山なんだけど一緒に登っているというイメージです。

これは実際にお父さん、お母さんたちのメンタルヘルスの支援プログラムをやっているんですが、そのときにも山メタファーという形で支援者の立場を説明するときにこれを使います。つまり、我々も子育てにどういう意味を持って、ハードな子育てをどうしていくのかという山を登ります。

垣田先生のお話でも就労ということでも、我々も同じで、なぜ働くのかということについての山を我々は登っています。私も個人開業していたときに、大学へ転身するときにどうするかという山の困難というものを、登りにくい山に出

会いました。

それから生活をどうするのかという山も我々もあります。そういう同じような山なんだけれども、違う山を登っているというイメージです。それについて、きょうちょっとお話をしたいと思います。

少し最初に発達障害のある子供さんを持たれている親御さんというのは、非常にたくさんのメンタルヘルス上の問題を抱えます。例えば、BDIというのは抑鬱をチェックする質問紙ですが、大体40%の保護者が抑鬱の範囲に入ります。すぐに病院に行ったほうが良いというようなスコアを持つ人たちもやっぱりかなり率が高いです。

司会 今回の保護者の方のデータでしょうか。

谷 これは保護者の方のデータです。一般的な健康尺度で言うと、70%ぐらいが健康上の何らかの課題を抱えています。世界中の調査でもほぼ同じような数値が出てきます。

メンタルヘルスに関連する要因の調査は実はたくさん行われています。つまりメンタルヘルスにどういったものが影響するのかについての調査研究は膨大な数があります。それを見ると実はソーシャルサポートを利用するということについてはダイレクトにメンタルヘルスには影響をしないと言われています。

ソーシャルサポートをたくさん利用している人はメンタルヘルスがベターなのかというと、そういう研究はほとんどありません。ソーシャルサポートを利用するとどうも保護者の人のコーピングスタイルが変わってそのことがメンタルヘルスに影響するだろうという研究が数多くあります。ソーシャルサポートはメンタルヘルスに間接的な影響を及ぼしているというのが世界各地で行われている調査研究のまとめということになります。

保護者の人たちのメンタルヘルスを支える支援について、まとめると、まず、スキルが必要

です。例えば生活を何とかするスキルと垣田先生のお話にもありましたけれども、保護者の人にも子育てを上手にしていくスキルを学んでいただかないといけないので、スキルを学んでもらうトレーニングというのを我々が提供するわけです。行動マネジメントトレーニングスキル、行動的なマネジメントスキルのトレーニングプログラムというものが1960年代ぐらいから非常にたくさん行われています。発達障害の子供さんを教えているときには、トイレトレーニングとか、御飯を食べる食べ方とか、ソーシャルスキルのトレーニングとかというのを全部提供しないといけないわけで、そういうスキルが十分であれば、お父さん、お母さんたちのメンタルヘルスはよくなるだろうという楽観的な見方というのは1960年代に非常にありました。実際はメンタルヘルスがよくなる人もあるけど、うまくいかない人も結構たくさんあります。スキルのトレーニングだけではなくて、認知的な側面への支援が必要だということがこの20年ぐらい言われてきて実施されています。

もう一つは、認知的な側面に影響を与えるようなソーシャルサポートを充実していきましょうということが言われています。その充実の度合いで言うと、発達障害の子供さんの御家族に対するソーシャルサポートはまだまだ日本では充実をしていないところがあります。ソーシャルサポートを使わない人というのもやっぱりたくさんいらっしゃるって、子供を預けないとか、預けることに非常にちゅうちょする御家庭もたくさんあります。

何のためにソーシャルサポートとか行動マネジメントスキルを学ぶのかということが重要であるというのがきょう、私が言いたいことでもあります。この視点というのは、実はことしの春、初めてソーシャルワークの関連の学会、アメリカの学会に行かせていただいて、そこで、心理分野の参加者は私だけでした。ソーシャルワー

クのいろいろな発表を聞いてきましたが、大きな違いというのは、行動の機能というものの検討がすごく違うなというのを実感してきました。

例えば不安な出来事とか、将来に対する不安とか、過去に対する反省とか、そういったものを解消するために行動的なマネジメントのスキルを学んだり、ソーシャルサポートを利用したりするということと、子供の将来とか自分自身のウェルビーイングのためにソーシャルサポートを活用るとかスキルを活用するというのは、ファンクショナルに全く違うものです。

我々が勧めたいのは家族や自分自身のウェルビーイングを高める目的のために、と言うことです。子供の幸せであるとか、家族の幸せとか、自分自身のウェルビーイングを向上するためにソーシャルサポートを使ってほしい、あるいはスキルを使ってほしいと考えています。子供が外で暴れたら私は恥ずかしいから子供をマネジメントする、マネジメントするスキルを学ぶようになると、不安がどんどん増大していくことになります。そこで、子どもや家族のウェルビーイングを増大するという目的でソーシャルサポートとか行動マネジメントスキルを学んで欲しいと思っています。

保護者の特性、コーピングスタイルの問題では、ローカス・オブ・コントロールとか自己肯定感とか自己効力感がとても大事だと言われています。もうローカス・オブ・コントロールとかの説明はよろしい。

**司会** ちょっとしていただいたほうがいいのかもしれません。

**谷** ローカス・オブ・コントロールというのは、どんなふうに出発点の原因と結果を意味づけするのかというスタイルですね。例えば何か困難があったときに、自分が悪いからそうなったのだという意味づけの仕方もあるし、外から不可避などうしようもない要因があったからそうなったのだというふうに意味づけをするときも

あります。そういう認識のスタイルが実はメンタルヘルスとか行動に非常に大きい影響を与えるんだという理論です。

自己肯定感、自分は良い人間であるとか役に立つ人間であると評価できる人、あるいは自己効力感というのは、自分が困難に出会ったときに自分は何々できる、この困難に対処できると自分を評価するかという点がメンタルヘルスに非常に大きな影響を与えていると言われています。

スキルを教えるトレーニングのことを行動的ペアレントトレーニングというんですが、BPTとまとめられるんですが、BPTを学んだら保護者のメンタルヘルスってよくなるんだろうか。あるいはそういうスキルトレーニングを実施したら逆にストレスになるんじゃないだろうかという問題が検討されてきました。ただでさえ子供を育てるのに大変なのに、そこに家庭でこんなトレーニングしなさいというトレーニングをしたら余計に負担になるんじゃないかという意見もあります。

BPTとメンタルヘルスの関係を調べてみると、一般的にBPTを実施すると知識は向上するし、ほかの人とのコミュニケーション、情報提供をすることもふえますし、子どもとの同期的なコミュニケーションも増大をしていきます。

もともとスキルのトレーニングはメンタルヘルスを向上するためのトレーニングではないんですね、あくまでもスキルを学ぶということなので、メンタルヘルスの問題はどうなっているのでしょうか。これはおもしろい調査、研究があります。これはオズボーンというアイルランドの人たちがやっている研究ですが、ストレスのある人たちにスキルトレーニングをやるとどうなるか、BPTの成果はどれぐらいかということですが、縦軸は子供がどれぐらいよく改善しましたかというデータです。非常にたくさんの時間を家庭療育に費やしている人と余りやらない人と、ストレスの低い人とストレスの高い人で

分けて調査をやっています。そうするとストレスが高くて一生懸命やっている人は、余りやなかった人と余り成果が変わらなくて、逆に子供の適用行動尺度、子供がどれぐらい適用行動を学びましたかというのはマイナスになっています。

つまり、スキルトレーニングというのはメンタルヘルスの状態によってうまいことだったり、うまいこといかなかったりするのだということがこの研究の中では示されてきました。

実際にエフェクトサイズを計算すると、このような数値がでています。メンタルヘルスに対するエフェクトサイズを計算するとペアレントトレーニングだけをやると、0.25ぐらいで、一番良いのはMCIと呼ばれる、メンタルヘルスのトレーニングとスキルトレーニングを合わせたトレーニングです。MCIの効果量が一番大きくなります。つまり、メンタルヘルスのサポートをやりながらスキルのトレーニングを合わせると、一番うまくメンタルヘルスに作用するということが示されてきました。

そのあたりをまとめると、スキルのトレーニングは子育てをうまく実施していく助けとなります。しかし、必ずしも保護者のメンタルヘルス上の困難を低減させるものとはなりません。メンタルヘルス上の困難が逆に大きいと、そういうスキルトレーニングとかがうまくいかなるということと言えるでしょうということです。メンタルヘルスの支援というのは、スキルトレーニングに先立って実施されるとうまくいんじゃないだろうかということを考えています。

先ほど、メンタルヘルスに関連する要因というのは、自己肯定感とか自己効力感とか、ローカス・オブ・コントロールというものが関与してくるとお話ししました。

ちょっと皆さん、考えてみてください。自己肯定感とか自己効力感って何だろうと。自分が大切な存在だとか、自分がかけがえのない存在

だと思える認知、認識のことです。自己効力感  
は自分にはある目標に到達するための能力があ  
るという認知なので、こういったものを持って  
いる人はメンタルヘルスが良くと報告されてい  
ます。当たり前と言えば当たりのことですが、  
これって本当にそうでしょうか。

例えばこんなふうに考えてください。何てだ  
めな父親なんだ、父親の資格なんて私にはない  
んだ。俺に障害のある子供の子育てなんかでき  
ないんだと考えている人は当然自己効力感と自  
己肯定感が低いわけですね。自己効力感や自己  
肯定感を上げたらよくなるのかということです  
が、私たちは、これを上げなくても、変化させ  
なくてもいいんじゃないのというプログラムを  
提供しています。

どういうことかという、このスライドを見  
てください。これは私の友人から拝借してく  
てくるものですが、この女性何の仕事をしてい  
るかわかりますよね。ウェイトレスさんです  
ね。エプロンにこんなことが書かれています。I  
bring nothing to the table. 何も私、テーブルに  
持っていないわと書いて、この人は何をやって  
いるかという、テーブルにいろんなものを持  
っていく仕事をしています。

つまり、考え、認知がどんなものを持ってい  
たとしても、我々は行動するところでは別の行  
動ができるというフレキシビリティを持って  
います。もし、自分が私は何もテーブルに持  
っていないということを考えて、それと同じ行  
動をするのであれば、この人は何もテーブルに  
持っていけなくなります。

認知と距離をとるという言い方をしますが、  
どんな考えを持っていたとしても、我々は、行  
動は別次元でできます。考えと行動の間にス  
ペースをあけるというやり方もあると考えま  
す。関西人は結構、赤信号で道路を渡ったら  
あかんという考えを持っているのに渡れるん  
ですね。つまり、それだけフレキシブルなの  
です、僕たちは。

認知というものに対してフレキシブルになれ  
ます。自分はだめだと思っても、子供のため  
に何かするということができるというフレキ  
シビリティを持っています。じゃあ、フレキ  
シビリティを高めればいいのであって、だ  
めな人間であるという評価を変える必要は  
ないのかというプログラムを提供しています。

つまり、認知に対する支援というのは大きく  
2つあります。1つは合理的な考え方を身  
につけるという方法です。自分はだめな人  
間だと考えている人には、「いや、あなたは  
そんなことないですよ」と考え、考えの  
内容を変えるように支援する方法です。あ  
なたにもこんないいところがあって、将  
来あなたは自分ができるという認識にな  
っていくのですよと支援するセラピーの  
提供の仕方です。もう一つは、どのよう  
な考えがあったとしても、考えとられず、  
自身と子供の価値に向かって行動をする  
という習慣をつくるというセラピーの提  
供の仕方があります。私が実施している  
のはこの方法です。1つ目の、合理的な  
考え方を身につけて、行動の活性化を図  
るというのは標準的な、伝統的な認知  
行動療法と言われるセラピーの仕方です。  
「あなたはだめな人間じゃないんだよ」、  
自分のいいところを見つけて、やれる  
という可能性に向かって行きましょう  
というセラピーです。

考えにとらわれないで自身と子供の価値  
に向かって行動を続けるというプログラム  
をアクセプタンス&コミットメントセラ  
ピー、ACTと言います。ことしのACT  
の世界大会が非常におもしろかったのは  
、ACT for Workplace スというテーマ  
でした。働くということについて、こ  
ういう心理的柔軟性を高めるような働  
き場所をどうやってつくっていくとい  
うテーマでした。考えにとらわれず  
に価値に向かって行動を続けるとい  
うのを、心理的柔軟性を高めるとい  
う言い方をしています。

科研費をいただきましたので数年前にテキ



トブックをつくって、大体 10 時間のプログラムですが、それをお父さん、お母さんたちに実施をしました。4 つ大きな研究をやっていて、先ほど言いました BDI とか GHQ とかがどれぐらい 10 時間のワークをやった後、変わっていくのかを兵庫とか名古屋とか福井でやっていました。それぞれの研究は非常にいい結果が出ています。その 10 時間のプログラムで非常にメンタルヘルス上の改善が見られます。

これはその結果ですが、この 2 つのデータがブレですね。プログラムを実施する前と、実施後と比較しています。ポスト 2 というのは、これは 1 カ月後のフォローアップです。そうすると、ワークショップの前から後に対して BDI も GHQ も有意に下がっていきます。非常におもしろいのはフォローアップでも下がり続けるということです。考えと距離を置く練習を続けていくと、フォローアップでプログラムの提供がなくなっても、それが持続していったってどんどんよくなっていくということです。このデータからはウェルビーイングに向かっているのかなということが見えていきます。

心理、それから医療の世界でもそうですが、臨床的重要性ということ、クリニカルシグニフィカンスという言いますが、実は病気であると判定されるレベルの人が、統計的にどれぐらい変化したかではなくて、通常のレベルまで何人の人が変化するのかが問題なのす。それを BDI でやりますと、我々の研究で言うと 4 割が下がります。GHQ で言うと 5 割の人たちが通常のレベルまで下がっていきます。これが高いか低いかは、実はこの研究をやっている世界のグループは幾つかありますが、このデータを出しているのは、今のところ我々のところだけなので、ちょっと比較対象がありません。

問題は、メンタルヘルスがよくなったのは、心理的柔軟性と関係があるのかという検討ですが、それをことし検討しています。心理的柔軟

性をはかる質問紙というのがあって、これは AAQ と言います。AAQ が BDI の変化スコアとどれぐらい関係があるのかというのをすると、有意な関係が GHQ とも出てきます。

最終的にどの要因がメンタルヘルスに一番大きく寄与しているかを、階層性の重回帰分析で分析をしていきます。すると、BDI とか GHQ というメンタルヘルスのスコアに一番影響を及ぼすのは、AAQ というスコアが残ってきます。つまり、心理的に柔軟になった人ほど、メンタルヘルスは改善をしていくという結果が出ています。これがことし、私が発表してきたものです。パスを書くところなふうになります。AAQ が変化するということがメンタルヘルスに影響を与えていると考えられます。つまり、先ほどのエプロンの図を思い出していただいて、私はだめだと思っても、あんなエプロンをつけているウェイトレスさんになるトレーニングをやってみるとメンタルヘルスは変わってくるんだということが明らかになってきました。

自分はだめだという考えを、変わらなくてもいいんだよ、変わらなくてもやれる方法というのがあるんだよということです。心理的柔軟性はメンタルヘルスの問題で考えると、とても大事なことになると考えています。心理的柔軟性を高める支援方法というのは検討していかないといけないということと、支援をする人たちにも同じことが言えるのではないのでしょうか。山登りをしているというのは同じなので、支援をするスタッフの人たちが自分のメンタルヘルスに対して、エプロンをつけているウェイトレスさんのように考えと距離を置いて、柔軟になっていくというスキルを身につけていくということが重要なんだろうと今、考えています。

たとえ嫌悪的な思考とか未来に対する不安とかがあったとしても、自分自身の価値に基づく行動を拡大して、ウェルビーイングを目指して、いきいきとした生活を実現するという目的で

ソーシャルリソースを使い、支援者支援を受け、直接的な支援を受けるという、こういうファンクションというものが非常に重要ではないだろうかと思っています。

ちょっと心理寄りのお話なんですけれども、保護者の人のメンタルヘルスの問題をなぜ我々が取り上げていったかという、実はスキルトレーニングをやってこんなことをやったらうまいこといくんですよというのはわかっている。わかっちゃいるけどやめられない、わかっちゃいるけどできないという人がやっぱり残ってくるわけです。これは就労のところでも同じで、わかっているんだけどできないよといったときに、メンタルヘルスは非常に大きいキーワードになってきます。そのメンタルヘルスの支援をしていくときに、あなたの考えとか認識とかコーピングスタイルを変えましょうねという支援の仕方もあるんだけど、そうじゃない支援の仕方もあるって、実は反復的に困難な状態が続いている人の場合には、きょうお話をしたような考えと距離を置くというやり方のほうがうまくいくことが多いんじゃないかと言われています。

例えばアディクションの問題とかには最近、こちらのセラピーのほうがよく使われます。我々のデータでも示したように、フォローアップになって、ずっと考えにとらわれないで、価値に基づいて行動をしていくことができます。それを続けていってくれるというのが大きな違いです。

30分ぐらいでお話を終わらせていただきましたので、ぜひディスカッションできたらと思います。以上です。ありがとうございました。

司会   ありがとうございました。

## 討論

司会   谷先生、かなり急いで報告いただきありがとうございます。フロアから質問受ける前に

1つ私の方から質問ですが、ワークというのがどんなことやられるか、少し補足説明いただけますか。

谷   ちょっと飛ばしましたが、このセラピーが山をメタファーに、たとえ話にしているというように、悩みを持つとか、不安になるとか、それから仕事の意義をどうやって見つけるかというのは、我々人間としての共通のテーマなんですよというスタンスです。

プログラムはレッスン1からレッスン7までつくっているのですが、言葉ってどういう性質を持っているでしょうということから始まります。まず普通、言葉って皆さんも持っているし、私も持っている、その言葉の性質というものがどんな性質があるのかを勉強しようということをやります。

後で、ディスカッションでお話をしようと思ったんですが、不安とか悩み事があったときに、皆さんどんなふうに対応をしていますかという問いかけをします。そのときに創造的絶望について学びます。これはCreative Hopelessnessという英語の訳語なのですが、「今やっていることがうまくいっていますか」という問いかけをするんですね。ちょっとディスカッションのところで質問しようと思ったのですが、困難な方は引きこもりの方とか、先ほどの事例なんかでもあったところですが、実はうまくいかないことを続けているんですね、皆さん。つまり毎月2万円、3万円お金が足りなくなると、うまくいかない。うまくいかないことを続けるというメカニズムは何でしょうねということ、それを言葉の問題として考え直すセッションです。「うまくいかないことをあなた続けてますよね。じゃあ、うまくいかないだったら別のやり方探しませんか」というのが、創造的という意味なんです。絶望というのは、うまくいかないことをやめてみましょうよという意味です。そこで、考えとか、不安であるとか悩み事をただ

単に観察するだけで置いていくというやり方を体験的なレッスンを通して、言葉と距離を置く、先ほどのメタファーなどをたくさん使うんですが、学んでいきます。例えば皆さんは、赤信号で道路を渡ったらあかんと思いながら渡れますよね。そういうようなエクササイズというものを使って、言葉と距離を置く練習をします。

その次のセッションとして、なぜあなたは子育てをするのかと問いかけます。子育ての意義は何でしょう。あなたにとって、大事な目的は何でしょうというものを探すというレッスンになります。これはワークプレイスの時は働くということの目的であるとか意義を見つけていくセッションです。

その次は、今度は不安とか悩み事に対処するのではなくて、自分自身の大切なもののために動く練習をしましょうというのが第6、第7セッションになります。最初のセッションの日から、1週間、2週間、時期をあけて、実際にあなたはあなたの大事なもの、つまり不安とか悩み事を回避するために行動するのではなくて、自分の大事なもののために行動するという習慣づくりができましたかというのをお父さん、お母さんたちで、みんなで振り返りをやっていくという流れになっています。

**司会** なるほど。ありがとうございました。フロアの皆さんから御質問など、どのようなことでも結構です。用語でわかりにくいところなどでも結構です。

**H** Hと申します。一番最初のメタファーの山2つ、1つが当事者が登っている山、もう一個が支援者が登っている山であって、当然、支援者は当事者を見るわけですね。だから支援になる。そのときに、当事者は支援者をどう見ているのかという問題。

**谷** このセラピーの中では同じ仲間なんですね。つまり、自分自身も働くということで悩みもあり、苦しみもあり、それに対して僕は自分の悩

み事とかに対してこんなふうに対処をして、こんなふうにやっていますよということもお知らせするし、だからセラピーなどではかなり自分の体験みたいなものも語ります。つまりモデルになるんですね。山を登っているときのモデルをするわけです。

**H** ということはすみません、言葉を足してしまおうと、する側、される側ということよりも一緒にというから先に立つという感じ…

**谷** そういうことです。

**H** ありがとうございます。

**谷** ですから、我々、お父さん、お母さんたち、発達障害のある子供さんを持っているお父さん、お母さんたちから学ぶことってすごく多いんですね。そんな大変なことからこんなふうに対処して、こんなふうになっていたんですねと、私も見習いますみたいなところは当然たくさんあります。

**司会** ありがとうございます。

今日の研究会は伴走型支援というテーマでやってきてますが、谷先生のお話は認知そのものを変えるというよりは認知と距離をとるというのが実は意味があって、むしろ回避的な行動ではなくて、認知と距離をとることで自分の大事なものを見つけていき、またそれに向かって行動を調整するというか。そのような発想になるワークが実はあるんだということですよね。

それが伴走型支援とどうつながるかが少しよくわからないところがあるのですがけれども。谷先生の実践とのかかわりで言うと、そういう療育とかに取り組まれている保護者の方が例えばこういうワークをすることで気づき、ワークをするということが伴走になるということなのか、ちょっとその伴走という話とこの話がどうつながるのでしょうか。

**谷** 先ほどアメリカのソーシャルワークの学会に出させていただいたときの感想をお話しましたけれども、ソーシャルリソースの機能は、不



安を回避するときのために使われることもあるし、価値に向かって、大事なものに向かって行動するという、どちらでも進められるわけで、ソーシャルサポートを提供しているワーカーさんであるとか、そういう人たちがひょっとするとこういう発想を持つことで提供の仕方が変わるんじゃないかと僕は思っていて、教育も同じだし、ソーシャルワークも同じように、この心理的柔軟性というコンセプトを持って、サービスの提供の仕方をするとう違う提供の仕方があるんじゃないか。それこそ2つの山を登っているような、共通の土台に立ったサービスの提供ができるんじゃないのかなと思っています。

**司会** ありがとうございます。今のお話でちょっと垣田裕介先生にもお伺いしたいと思います。先ほどケースの分析がいろいろ出されたんですけれども、そこで心理過程までは踏み入ったことは、ここにはされていないと思うんですが、実際そういう、先ほど御質問にはありましたけれども、相談実務に取り組まれる方というのは非常に多様な問題を抱えられた方に対しては、そこで今のようなお話というのはどうでしょうか。ちょっと場面が全然違うんですが、何か活用する方法とか、あるいはちょっと違うんじゃないかというのがあれば、コメントお願いできますか。

**垣田** 例えば、ホームレス支援のこの本に登場しているNPOで私がフィールドで通っている支援現場には、臨床心理士の方がおられたりしますけれども、まずそういう心理の専門的なスタッフというのは多くの支援現場にはほとんどなくて、いたとしてもその方が心理のプロパーだから、もうその人にお任せということになったりして、さっき先生おっしゃったように、認知行動療法とか、それとは違ってこんな方法もということの議論が全然できないんです。

**谷** 心理は、やっぱり行動の機能という問題を考えるんですね。ソーシャルサポートを何の目

的に利用するのかということが問題であって、でも、行動の機能を前面にした政策というのはあり得ないと思うんですね。同じ状態の人でも行動の機能は別なことはあるわけですね。貧困であると。ソーシャルサポートを使うときに、苦しさを回避するためにソーシャルサポートを使う人と、同じ経済状態で、いや、子供の将来のためにソーシャルサポートを使うんだという人は区別できないわけだから、政策決定上は絶対ファンクショナルな機能的な政策決定、政策がつくられない。そこはどうしたらいいのかなというのは、私はこの春から自分の課題としていることで、機能的な分析に基づいた政策の提供って、何か方法がないんだろうかというのが心理屋から見たときの意見なんですね。

**司会** 政策というのはどのレベルですか。

**谷** 例えばこれぐらいの貧困の人だったらこういうものが受けられるという政策というか、ありますよね。サポートとか。

**司会** はい。そしたら、そういう問題に直面している人は、さっきのようなワークを例えばやれる、チャンスが与えられるみたいな、そういうようなことですか。やれと言わないけれども、受けようと思ったらそういうサービスも受けられるというような。

**谷** はい。

**司会** わかりました。もう一つ質問です。今、1セットのワークで効果があるという話なんですけれども、実際こういう発想というか考え方が、現場でそういう対面をされている方、相談者がいろいろ学ばれて、ある種の面接というのか相談の中で何かヒントを与えるという形で活用できるものなんですか。

**谷** と思います。実際には、ソーシャルワーカーさんにこのプログラムを提供するというのは、実はたしかイングランドかアイルランドかで何かされていると思います。

**司会** そうですね。ありがとうございます。ほ

かに、何かございますか。

H 先ほどの垣田先生の話の最後のところで、地域とか民生委員からも放り出されている人というのがあったんですけども、2つあって、それは、その人と地域とか民生委員の力関係とか、極端に言うとも民生委員の力、力量みたいなこととの関係で放り出すか、放り出さないかというのは決まるよねということが1つ。

でも、放り出されているというケースになってしまっているということを前提にすれば、それが先ほどの制度だと、本人の合意というものが大きなボトルネックになるわけですね。律速になるというときに、突破できるの。

例えばさっきの話で、社協が担わされるというか担うという話だったんですけども、社協の人たちと民生委員と、権限としては明らかに民生委員が強いですね、今のところ。それが放り出しているものを社協が請け負ってどこまでできるのというのがちょっと疑問というのが1つ。

もう一個は、民生委員の人たちが持ち回りで、「私らじゃできないわ」というので放り出しているところで、今の谷先生のような、思ってもできることあるよねというのを放り込んでいくというのは何か、そういうプログラムが民生委員さんに投入されたら変わるんじゃないかという気持ちがありました。その2つ。

司会 ありがとうございます。谷先生いかがですか。

谷 私は ACT というセラピーを学んで、心理というところで使っていますけれども、これは教育でももちろん使えるし、大学生にも使えます。大学生のキャリアのところでは必ず私は、あなたは働くということで何を選択するんですかということをします。いろんなところで使えるし、そのことに気がついた人は困難があっても自分自身の大切なもののために向かっていきます。

ですから、この ACT という物の考え方というのは、アディクションとかの人たちに非常に効果が出ていますので、民生委員さんたちがそういう考え方を知っていてアドバイスができて、何かすると非常にいいんじゃないかなと思っています。大変賛成なところですよ。

司会 ありがとうございます。垣田先生、何かありますか。

垣田 難しいですね。どうかな。民生委員の放置という問題を社協がというか。この制度が、何と言うんでしょうね。これまでも私たち、ホームレスの調査とか支援に携わってきて、逆に民生委員とか、民生委員がいるのに、あるいは社協があるのに、もしくは生活保護制度があるのに、なんで路上で寝ている人がいたり、路上で死ぬ人がいるんだという、これは明らかな矛盾だと思ってやってきたわけなんですね。そのときに、社協があるのにホームレスが生まれる、それは誰が救ってきたかといったら、多くの NPO だったり個人のボランティアだったりしてきたわけですね。だから、今度の制度が運営された後においても、何もできないままにいる民生委員、何もできないままにいる受託している社協ということは変わらず起こり続ける可能性はあるんだろうと思います。

それは、まず一つは、谷先生のいう行動と考えるとの距離という以前に、フロアの彼から質問があったように、まず、支援するスキルがあるのかどうかということです。座学の研修とかいろいろありますけれども、課題を抱えている方が目の前に来られて、この方はメンタルで何か課題があるとか、知的障がい疑いがあるとか、どのように就労が難しいとかということをその場で見抜く、見きわめられる力というのは、1年、2年で身につけられるかというと、そうではないと思います。

大都市部の場合には新法でうまくいかなかった下に埋もれていっても、いろんな困窮者支援団

体が、力を持っている団体がこの京都にもあるわけですが、それが地方の場合にやっばり困ったことが出てくるだろうと思うんですね。最後の受け皿的なものが多くの場合ありませんので。

だから、すみません、そういう懸念を持っているということしか私はお答えできないですけども。

**野田** 産業社会学部の野田正人といいます。大学院は谷先生と同じ応用人間科学研究科なんですけど、臨床心理士でもあるし、社会福祉士でもありますし、両方の課程を指導しています。

先ほど谷先生が言われた制度、政策、あるいは立案の時点で個性性というか、どのプログラムというところという、多分そのあたりを何とかしようということからソーシャルワークというのが始まっているものなんだろうとは思いうんですね。

つまり、ソーシャルワークの一番初期のソーシャルケースワークというのは、一人一人がそれぞれ違うんだよ、だからケースワークなわけです。そうすると最近のインディビジュアルプログラムとか、領域によって呼び方違いますけれども、スペシャルエデュケーションニーズとか。そういうものも、箱はがちとしたものなんだけれども、その中で、実は一人一人違う人だという視点がある。ただ、そこところで貧困問題みたいな複合性を持っていると、今言われたみたいに、そこにおけるスキルができてない。

その辺で言うと、今回の伴走型というのも、谷先生の文脈でいけば、むしろどのフレームで動くかということは別として、かなりソーシャルワーク的なことを、しかもインテンシブに、しかも時系列なく、当然伴走ですからね、次の角っこでやめますという話ではない形ですめる必要がありますね。とすると、民生委員さんでも再任や登用が難しく、任期が3年という。あるいは公務員さんで頑張っている、1年後

には異動しちゃうとか、またメンタルでしんどくなって半年でやめちゃったみたいなね。

そういう状況の中で、距離感だけではなくて、時系列としてどれくらい長くできるのかというファクターが、ソーシャルワーク側から見ていると大きくて。ですから伴走型と言われてしまうと、来年も再来年もその次の正月や年末のしんどいときも一緒にいてくれるよ、というぐらゐのイメージがないといけないということになる。となると公務員じゃ無理じゃんという話になって。ちょっとそういう印象を私は一番最初は受けていたんです。

それはともかくとして、今のフィールドとの関係での御質問ですけども、民生委員制度というのが岡山の済世顧問制度や大阪の方面委員制度から始まって、大正期から始まるわけですけども、この間、日本が福祉国家を目指していて、公的責任があるんだというところの、いい意味での手先というか出先というか、その役割を果たしていた時期と、新自由主義と呼ぶかどうかはともかくとしても、小さな政府を目指す。アメリカでのこの間の、さっきの個別支援みたいなことというの、公的な責任をどんどん後退させて、かわって自己決定を尊重しながらその枠組みをつけていきたいと思いますという流れに、少なくとも福祉領域で議論するときには切りかわっている。

その中で、日本もどっちかといえば福祉サービスを措置から契約へ、あるいは福祉サービスを買うんだというような発想になっていったときに、しっかり選べない、しっかり買えない人に対してどんなふうなインフォメーションしながら、どういうふうにより添うかという。そのプラットフォームというか、土台がどんなふう動いているのかということと、決して無縁ではない話だろうし、今の御質問も無縁ではないなと思いつき次第です。

**司会** 質問というよりコメントでしょうか。

**野田** 質問として返すなら今のこと。つまり、福祉構造そのものが介護保険以降変わって、あるいは変わっていて、その中で私の専門はどちらかといえば本人が買わない、おせっかい介入だと。児童虐待とか犯罪が専門ですんで、その立場から言うと、そここのところが課題の1つに挙げていただいていたので、選べない、買えない人への伴走型というのが改めて課題というのはよくわかったんですけども、克服の方向、あるいは整理の仕方はどうなんかなと考えています。

**司会** ありがとうございます。実はもう時間がきてしまいました。野田先生の質問への回答も含めて、最後に垣田先生、谷先生から一言ずついただけますか。

**垣田** きょう、スライドのほうに書かなかったんですけども、別紙のペーパーのほうには、最後に、社会政策の捉え方みたいな話をしています、私が参照している一橋におられた高田先生の議論や中川清先生の論文を持ってきているのは、社会政策として福祉を含めて、社会政策というのは、母子とか高齢者とか、そういう集合的な対象に対して、こういう支援策をする、給付をする、規制をするということをやってきたんですけども、伴走型支援とか新法に見られるように、私がペーパーで書いているのは、制度を用意するだけでは人は救われないという当たり前のことなんですね。制度を用意して、使いたい人は申請主義で使ってください、もしくは救済を受けてくださいということではなくて、制度をコーディネートして、その人に提供するという媒介行為的な役割が必要なんだと。個人が自己決定できない方の場合も、世帯の場合も多くおられますので、社会政策というものを、実際に対象者を見つけて、制度と結びつけて、そして使っている間、使った後にどのような状態変化があるかということについても、きちんと伴走するというような一連の運用のありよう

として社会政策を捉える方がいいのではないかという議論をしているところです。

そういう意味においては、社会福祉で議論されていることはまさしくそういうことなんです、社会政策全体として見た場合にもそういうことを学ぶ必要があるだろうということです。

**谷** 野田先生の御質問はなるほどだと思います。伴走で、マラソンの形で言うと、たすきをどうやって渡すかということがずっと必要なんだなと思いました。でも、山登りというメタファーで説明しましたが、山登りということになれば、我々、たくさん山を登ってる人たちがいるので、そっちのほうは僕はイメージとしては、伴走、今の僕の考えで言うとね、お互いみんな違う山なんだけれども、山を登っているんだよという伴走の仕方というのを今、イメージをしています。

それから、垣田先生のお話の中にあった、スキルを学習してもうまくいかないというのは、本当に発達障害の親御さんの臨床をやってもそうで、スキルを教えても使わない人がたくさんいるので、そこをどうするのということを僕が考えてこういうプログラムになったと思うので、制度を用意しても、制度を用意したら使うかといったら、それは違うよなと思います。

ありがとうございました。

**司会** もう時間になりました。きょうは活発に御議論いただいてありがとうございます。今日の2つの報告は、伴走型ということに関しては違う文脈ですけども、何か見えるものがあったのかと思っています。報告の一部は、何らかのかたちで本研究所の学術誌『立命館人間科学研究』にまとめていきたいと思っています。

最後に報告いただいたお二人の先生にもう一度拍手をして終わっていきたいと思います。ありがとうございました。



## 謝辞

本研究は、以下の助成を受けて行われた。

- ・文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(2013年-2015年度)「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環

型研究」(研究代表者：稲葉光行)

- ・JSPS 科研費基盤研究 (C) 26380965 「子どもと保護者のメンタルヘルスを支える教員研修プログラムの開発」(研究代表者：谷晋二)